ＩＩＡＳ塾ジュニアセミナーテキスト
（VOL. 02016）

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

日本社会の古層から日本的なものを発掘した人物

（思想・文学分野）

太宰治『走れメロス』と夏目漱石『坊ちゃん』に学ぶ

～「友情」の光芒。その背景としての「政治」性　～

公益財団法人国際高等研究所
ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2017 年 1 月 1 1 日開催の第 43 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。
※本テキストは、2018 年夏季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

日本社会の古層から日本的なものを発掘した人物

『走れメロス』と『坊っちゃん』における友情

太宰治の『走れメロス』は、理想の友情を描いた作品として有名です。でも少し変なところもあります。身代わりになったメロスの友人セリヌンティウスは、たった一度メロスが帰ってこないかもしれないと疑ったと言います。メロスをよく知る親友なら、メロスがおよそどのような場面でどのようなことをするかはわかっていたはずです。それなら帰ってこなかったとしても、それなりのやむを得ぬ理由があったのだろうと思うのが普通でしょう。

他方、夏目漱石の『坊っちゃん』も、見方によっては友情を描いたものと言うことができます。同僚のうらなり君が、赤シャツたちから不当な扱いを受けたのに憤慨して、連帯して制裁を加える話だからです。

両作品の主人公は、無鉄砲な、どちらかといえばやや無分別な若者という点で、似た所があります。友情を描くには、思索的タイプよりは、行動的タイプの方がぴったりということでしょう。この両作品を友情という点で比較対照することで、友情の本質とは何か、『走れメロス』において隠蔽されているものは何なのかについて解明してみたいと思います。

田島　正樹（Masaki　TAJIMA）

1950 年大阪市に生まれる。東京大学教養学科フランス科卒業、東京大学大学院博士課程（哲学専攻）修了、元千葉大学文学部教授。哲学者。

著書に、『ニーチェの遠近法』（青弓社 1996）、『哲学史のよみ方』（ちくま新書 1998）、『魂の美と幸い』（春秋社 1998）、『スピノザという暗号』（青弓社 2001）、『読む哲学事典』（講談社現代新書 2006）、『神学・政治論』（勁草書房 2009）、『正義の哲学』（河出書房新社 2011）、『古代ギリシアの精神』（講談社選書メチエ 2013）などがある。

目次

Ⅰ　『走れメロス』における「友情」を論じる。
（１）違和感を覚える「メロス」と「セリヌンティウス」との友情
（２）「友情」と「愛情」の違いを画するもの、「特徴的な無関心」
（３）典型的な「友情」の例を、シーザーとブルータスの関係に見る。
（４）「友人」との最後の別れのシーンを、古典に照らして描いてみる。
（５）暴君の暗殺を企図した「メロス」。友人「セリヌンティウス」の心情
（６）「メロス」と「セリヌンティウス」との友情、その違和感の正体

（補遺）
『走れメロス』の原型、シラーの物語詩に、その異同を尋ねる。

Ⅱ　『坊ちゃん』における「友情」を論じる。
（１）『坊ちゃん』のあらすじ。その政治的バックボーンを探る。
（２）法的・社会的敗北者を救う文学。その論理
（３）「坊ちゃん連合」が「赤シャツ連合」の真意を見透かすことができる理由
　　―　「敗北者連合」としての政治的バックグラウンドの存在
（４）「坊ちゃん連合」によって暴き出される「赤シャツ連合」の欺瞞性
　　―　「理由付けの事後性」の論理を、そこに見る。
（５）「理由付けの事後性」と信仰。「坊ちゃん連合」との相似

（補遺）
「数学の証明」にも見られる「先駆的な行動」と「事後的正当性」

質疑応答

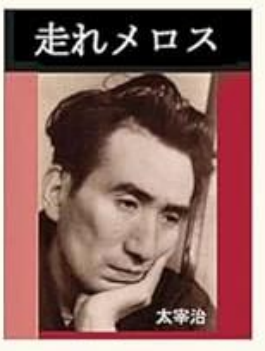
次代を拓く君たちへ　―　田島正樹からのメッセージ　―
　文学が教えるもの

2017 年 1 月 11 日開催
第 43 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：『走れメロス』と『坊っちゃん』における友情
講演者：田島　正樹（元千葉大学文学部教授）

Ⅰ『走れメロス』における「友情」を論じる。

（1）違和感を覚える「メロス」と「セリヌンティウス」との友情

『走れメロス』を中学生時代に読んだとき、何か「違和感」を感じた。最後のところで、セリヌンティウスはメロスが帰って来ないのではないかと一度だけ疑った、だから私を殴ってくれと言う場面がある。メロスはメロスで、大変苦労しながら走って帰って来るが、途中で、もう帰っても無駄だからと走るのをあきらめようとした、だから私を殴ってくれと、セリヌンティウスに言った。それでお互い殴ってひしと抱き合う場面がある。この場面を読んで、どうも芝居がかった嫌な感じがした。



『走れメロス』太宰治
（出版：グーテンベルク２１）

まず、芝居がかった感情表現がやけに大げさ過ぎる。このような芝居がかった大げさな身振りは、親しい友人たちの間にはふさわしくない。友人たちはさりげない感情表現をするのではないか。さりげなく相手を思いやるのではないか。感情表現はできるだけ慎ましくするのではないか。特に、自分たちの友情を、大げさにひしと抱き合って表現するようなことはしないのではないかと思う。

例えば、サッカーのワールドカップの決勝まで勝ち進んで、最後の最後、終わりの 5 分間で逆転のゴールを決めた。そのようなときにひしと抱き合うのはふさわしいかもしれない。しかし、そのような場合でもない限り、こういう大げさな感情表現は、友情にはふさわしくないのではないかと感じる。

昔から、君子の交わりは、淡きこと水のごとしと言い、感情的な交わりではない。一橋大学の同窓会は「如水会」という。淡きこと水のごとし。水のように淡い交わりをするのが君子の交わりだと言うわけである。

（2）「友情」と「愛情」の違いを画するもの、「特徴的な無関心」

メロスとセリヌンティウスの友情は少し濃過ぎる。この芝居がかった身振りこそは友情に似合わない。特に、メロスとセリヌンティウスは、お互いに相手がひょっとしたら裏切る

かもしれないという恐れを密かに感じている。また、ひょっとしたら自分が相手を裏切ってしまうかもしれないという、そういう恐れも感じている。つまり、相手に対しても、自分に対しても、その心、その思いがどうなのだろうかと、強い関心を寄せている。相手の心に関して、あるいは自分の心に関して強い関心を持つことも余り友情には似合わない。

友情は、どちらかというと相手に対して「特徴的な無関心」というものを持っている。「友情」と「愛情」を比べると、「愛情」は、相手に対する強い関心を持たなければならない。「愛情」は、常に相手が何を考えているのかを気にするものである。恋人とか家族は常に相手が何を考えているか、どのようなことを思っているのかを常に気にしていなければならない。よく親は子供に対して、お前のことは信頼しているよと言う。しかし、本当に親が子供のことを信頼しているかというと、これは少し怪しい。むしろ、親は子供のことを本当は信頼していないからこそ、信頼しているよと言わなければいけない。つまり、親は子供のことを気にかけていなければ子供が何か変なことをしてしまうかもしれない。常に家族は、そういう強い関心によって守られなければいけない。夫婦の場合でもそうである。夫婦はお互いに無関心でいることはできない。相手がどういうふうにするか、あるいは相手が困っているのではないか、ひょっとしたら浮気するかもしれない、そういう心配は夫婦の場合は必要なわけである。そういう心配をしないと本当に浮気する。

ところが、友人は、そのようなものではない。友人というのは、相手がだいたいどのような奴か俺は知っているよ、という気持ちを持っている。長いこと友人から便りがないとしても気にしない。当分連絡が来ないことがあっても全然気にかけない。まあ、だいたい元気でやっているのだろうと思う。そういうのが友人である。つまり、少なくとも相手のことを知ったつもりでいる。友人というのは友人のことを、だいたいあいつのことは、俺はよく分かっているのだという気持ちでいる。だから、ことさらそれに強い関心を向けない。本当にそれを知っているかどうかは分からない。人間というのは複雑なので、本当に全てを知っているようなことはあり得ない。全てを知らなければならないとさえ感じないのが友人同士の関係である。

恋人の場合は全くそうではなくて、もちろん全てを知っているわけではないが、少なくとも全てを知ろうと常に強い関心を払い続ける。「愛情」はそういうものである。だから、「愛情」と「友情」は、その点でかなり違いがある。

ともかく、『走れメロス』には、特に相手の心について、相手の思いについての強い関心があり過ぎるように思う。

（3）典型的な「友情」の例を、シーザーとブルータスの関係に見る。

シーザーとブルータスの関係を考えてみる。ブルータスは、最後にシーザーを裏切る。カッシウスや他の上院議員とともにシーザーを殺害する。その時、その一団の中にブルータスがいることを見つけたシーザーは、「ブルータス、お前もか」と叫んだ。「Et tu, Brute?（ラテン語:エチュ・ブルーテ）」と叫んだ。これは、シェークスピアの『ジュリアス・シーザー』の中にもラテン語で引用されている。シーザーは、ブルータスが裏切者の中にいることを見つけてどう思ったのだろうか。まさかあのブルータスが裏切るとはと、びっくりしたのか、そうではない。むしろ、ブルータスのことをシーザーはよく知っている。身近に付き合っている。目も掛けてもやっている。シーザーは、ブルータスの気持ちや性格、考え方もよくよく分かっている。まさかブルータスがとは思わずに、ああ、やはりと感じたのだと思う。やはりと言うのは、そういうことをやりかねないことは既にシーザーの頭の中にあった。ところが、それを忘れていた、うっかりしていた。ブルータスは、ひょっとしたら自分を殺害するぐらいやるかもしれないことを本当は考えておくべきだったのに忘れていた。

なぜ、そのようなことを忘れていたのか。ここに友人に対する「特徴的な無関心」がある。シーザーはブルータスのことをどう見ていたのか。おそらくは、年も若く血気盛んで高潔な人物、純粋で一途なところがある、特に共和国ローマに対する一途な愛国心を持っている立派な男だと考えていた。それと同時に、ブルータスの政治的な見識に対して、シーザーはやや見下していた。この男は若くて政治的な経験も乏しいためリアリズムに欠けている。つまり、高潔で道徳的には立派な男ではあるが、政治的な見識が少し欠けている単純なところのあるやつだと思っていた。だから、もともと強硬な共和主義者であるブルータスとシーザーとは考え方が違っていた。

シーザーも共和国ローマが悪いと言っているわけではない。しかし、彼はなんと言っても、ガリア[1]で軍事的経験を積んでいる。ガリアの地でケルト人を相手に戦って軍功を上げ、ガリアという広い土地をローマに捧げた。その後、プトレマイオス朝[2]のクレオパトラのエジプトをローマの版図に加えた。広大な版図を手にしたローマがどのようでなければならないかをシーザーは当然考えた。ブルータスのように政治的経験がなく、ただ昔の共和国の夢を追いかけている単純な理想主義者ではない。シーザーは、当然、この広大な版図を支配するためには緊急発動権のような軍事的な力が必要だ、緊急発動をする権限を一手に握る独

[1] ガリア人が居住した地域の古代ローマ人による呼称。 具体的には現在のフランス・ベルギー・スイスおよびオランダとドイツの一部などにわたる

[2] 古代エジプトのヘレニズム国家の一つ。アレクサンドロス 3 世（紀元前 356-紀元前 323）の死後、部下であったプトレマイオス（紀元前 367 年-紀元前 282）が創始した。首都はアレクサンドリアに置かれた

裁者、いわゆるディクタトール[3]とかインペラトル[4]とかが必要だと考えた。

これまでのようなプラエトル[5]とか、ケンソール[6]とか、あるいはセネタース[7]とか、そのような古いローマ共和国の支配体制では不十分であることにシーザーは気がついている。新しい政治体制が今や必要なことを実感し、また、自分の経験でそれが不可避なことも知っている。そういう人間から見ると、このブルータスのような単純な理想主義ではうまくいかないことを、シーザーは確信している。このように政治的には一段高い立場からシーザーはブルータスを愛していた。

なぜ、そのように見識も違うし、イデオロギーも 180 度違うブルータスを、シーザーは身近に置いて、しかも愛したのか。これは、シーザーはそのような人間こそローマにとって必要だと思っていたからである。つまり、シーザーは大変な人気で、権力も持ち頂上へと昇り詰めようとしている人間だから、その周りに取り巻きが蝟集(いしゅう)してくる。そういう連中からちやほやされる。ところがシーザーはそういうおべっか使いには見向きもしなかった。そういう連中は、いざというときには頼りにならないことを、シーザーは彼の軍事的な経験の中で知っている。

ガリアで本当に戦ったときに頼りになるやつは気骨のある男なのだ、気骨のある男は自分の前に出ても、平気で自分を批判する。あるいは異見を言う。それで叱られることも気にせず自分を諫める。そういう勇気ある男、そういう連中こそが、いざ戦場となると、気骨を発揮して軍のために役に立つ。それをシーザーは自分の軍事的経験の中で知っている。そういう人間こそが国家のために役に立つことを知っている。自分の立場と違うブルータスのような青年こそが今後必要なのだ。自分の支配のためにもブルータスが片腕になってくれるであろう、こういう人間が必要だと、シーザーは信じている。だからこそブルータスをかわいがり、自分の身近に置いた。この男は単純なところがあるが、結局は役に立つのだ、この男を育てよう、と考えていた。その気骨ある人間だからこそ、ブルータスがシーザーを暗殺するのに加わったとしても不思議ではなかった。それに気がついたとき、シーザーは「あ、ブルータス、やっぱり」と感じたはずである。

---

[3] 独裁官(dictator) 。国家の非常事態に任命される官職

[4] 古代ローマとくに共和政ローマにおけるローマ軍の最高司令官・将軍の称号、またはローマ帝国における皇帝あるいは帝権、王権のこと

[5] 古代ローマの政務官職の一つ。日本語では法務官と訳される。共和政ローマではコンスルに次ぐ公職で、インペリウムを保有し、主に司法を担当した

[6] 古代ローマの官職。監察官と訳される

[7] ラテン語で「Senatus」、王政ローマにおける王の助言機関、またのちの共和制ローマでは統治機関、さらにのちにはローマ帝国皇帝の諮問機関を指す語

（4）「友人」との最後の別れのシーンを、古典に照らして描いてみる。

―　『走れメロス』の場合・・・

メロスはディオニシウスの暗殺を企てた。その理由は暴君だからというだけの単純なことである。暴君だから殺していいのか、そんな簡単なものなのか、と少し疑問に思うが、そういう argument（議論）は一切書かれていない。暗殺を企てたものの、それに失敗し簡単に捕まってしまう。メロスは、人質としてセリヌンティウスの名を挙げて自分の身代わりとし、3 日間の猶予を願い出る。そして許される。その時、セリヌンティウスはメロスの呼びかけにこたえて、直ちに人質になることを引き受けた。なぜ、そのように重要なことを簡単に引き受けたのか。友達だから引き受けたと言えるのか。友達であればどのようなことでも言われるままに引き受けていいのか。

メロスが企てたのはテロリズムである。このテロリズムが正当化されるかどうか、議論の余地がある。もし、メロスが、この企てをセリヌンティウスにあらかじめ相談していたならどのようなことが起こっただろうか。セリヌンティウスは本当の友人として、それは危ないから止めておけとか、確かに暴君ディオニシウスはけしからぬやつだが、だからと言って殺害することが正当化できるのか疑問の余地があると言ったか、あるいは、それはまさにやるべきだ、君がやれ、私はそれを見ていると言ったか。いずれにしても簡単は話ではない。もしメロスの殺害計画が、政治的に倫理的に一点の曇りもないものであったとしても、人質を引き受けるかどうかは、また別の問題であるかもしれない。

メロスとセリヌンティウスは前日に、あるいは前々日に会っている。必ず会っている。自分がいよいよ暗殺する決意を固めたときに、しかも人質になってもらうことを頼むほどの親友に会わずにそのまま暗殺に出かけるだろうか。そのようなことは決してない。死を覚悟しており、当然、永遠の別れになることは知っている。そのような男は、昔からの友人に最後の別れをするに決まっている。だからセリヌンティウスと水盃（みずさかずき）か酒を酌み交わすかはともかく、酒を飲み交わして最後の別れをしているはずである。

この暗殺はシーザーの暗殺とはわけが違う。シーザーの暗殺はたやすい。シーザーは非常に人望があり、自分の身の周りを護衛しようとは思ってもいない。ところが、ディオニシウスは暴君で専制的なことを行い皆から憎まれていることを知っているので、周りに護衛兵をたくさん置いているに決まっている。しかも、秘密警察か何かが目を光らせている。そういうのが独裁者の常である。だから独裁者を暗殺するのは大変難しい。成功する確率は低く、自分の死をかけた仕事であったのは間違いない。

― 『史記（刺客列伝）』の場合・・・

司馬遷[8]の書いた有名な『史記』の中に「刺客列伝」がある。「刺客列伝」はテロリストの列伝である。その中に荊軻という人物が出てくる。彼は、秦の始皇帝になるであろう人物を暗殺しようとして、燕の国から易水という川を渡って秦に侵入する。中原よりも西の方に秦の国が興って、これがだんだん中原に伸してくる。最後に、燕の国が残る。

中原の場所（戦国時代後期の地図）/中国語スクリプトより

この燕の国の太子・丹は、これは大変なことになった、秦の政を暗殺しなければならないと、刺客を頼む。田光先生という人に刺客をお願いする。田光先生は有名な武術家であったらしい。すると、この田光先生は、もう相当年をとってしまって役を果たすことができない、いい人物を紹介すると言って、この荊軻を紹介した。

太子・丹は、今の話は大変ありがたいが極秘にしておいてくれ、と田光先生に言う。田光先生は荊軻の元に行って、こういうことで刺客になってほしいと頼み込む。そして燕の国の太子・丹からぜひとも極秘にしてくれと、自分は言われた。自分は秘密を守ることができないかもしれない男として見られたので、私は秘密を絶対に守るためにこの首を差し出すと言って、その場で首を切って死ぬ。その話をもって荊軻は太子・丹のところに来る。太子・丹はそんなこととは知らず田光先生が自殺して果てたと思って嘆き悲しむ。その後、荊軻はいよいよこの秦の国に入る。秦の国に入っても始皇帝は大変警戒深いから簡単には会ってくれない。

そこで、秦の国から亡命している樊という将軍がおり、この将軍には賞金がかかっていることに目を付け、その樊将軍に会って君の首をくれと言って荊軻はその首をもらう。樊将軍は自殺して自分の首を差し出す。その樊将軍の首を持って荊軻は秦の始皇帝の前に出ていく。このようにして暗殺計画の場面で既に 2 人の人物が自ら命を落としている。

そうしてこの易水を渡る。易水を渡るときに、荊軻は「風蕭々として易水寒し。壮士一度去って復た還らず」という有名な詩を 2 度繰り返して歌った。壮士一度去ってまた還らずとは、易水を渡って秦の始皇帝の暗殺を企てたからには、もう二度と帰ってくることはないということである。これ、死出の旅路である。死出の旅路に出た人間がどのような心持ちで出ていくかが『史記』の中にリアルに描かれている。メロスは、こういう気持ちでディオニシウスの暗殺を計画しているはずであり、そのようなときに自分の親友に何も言わない

[8] 司馬遷（紀元前 145/135? –紀元前 87/86）は、中国前漢時代の歴史家で、『史記』の著者

で出ていくことはありえない。

― 『忠臣蔵』の場合・・・

『忠臣蔵』[9]の中に赤垣源蔵という人が出てくる。この赤垣源蔵は、討ち入りが決まったその夜、お兄さんのところに最後のお別れに来る。しかし、あいにくお兄さんは城勤めで留守をしている。そこで兄嫁さんと会って、これから遠いところへ出ていくのでちょっと留守をする。お兄さんとお別れをしたかったと言って、お兄さんの羽織、袴の飾ってあるところで、一人で徳利酒をする。これは「赤垣源蔵別れの徳利」として講談でも有名な場面である。一人徳利で酒を飲んだ後、雪の中を帰っていく。つまり、最後の別れのときには、死に目にもう会えないときには、必ずこういう別れの儀式がある。

だから、メロスはセリヌンティウスと必ず会っている。その会った時に、自分はこれからディオニシウスを暗殺すると言ったかというと、セリヌンティウスに迷惑がかかるから、これは言っていない。自分の気持ちはもちろん出さずにただ酒を酌み交わした。そうすると、セリヌンティウスの方は何も知らないわけなので、このディオニシウスがいかに酷い王様か、ということをくどくど言った。あいつはけしからん、殺すしかない、というようなことを言った。ところがメロスはそれを聞いて、自分がやろうとしているわけなので、いや、そんな危険なこと言わない方がいいよ、どこかで秘密警察が目を光らせているから、そんな話はここでしない方がいいよ、というようなことを言って、メロスはセリヌンティウスを諌めていると思う。ところが実は、自分の方がいよいよ明日殺すぞ、と思っている。そういう場面が前日、あるいは前々日に必ずあったであろう。

（5）暴君の暗殺を企図した「メロス」。友人「セリヌンティウス」の心情

メロスは暗殺に失敗した。このディオニシウス暗殺失敗の話は、よくやった、しかし残念だったという気持ちを伴って、シラクースの町にパアッと広がる。その話を聞いたセリヌンティウスは、自分のところに最後の日に別れに来たのはそのためだったのかと、その時初めて気がつく。あの時、何も言わなかったが、あいつはそこで暗殺の計画を心に決めていたんだ、ああそうだったのかと、気がついてやれなかったことをセリヌンティウスは恥じる。

セリヌンティウスは自分こそやるべきであった。自分こそがメロスの代わりに、メロスがやる前に、ディオニシウス暗殺をやるべきであった、あるいは二人でやった方がよかった、

---

[9] 忠臣蔵は、 人形浄瑠璃（文楽）及び歌舞伎の演目の一つで、1748 年に大阪で初演された『仮名手本忠臣蔵』の通称。また歌舞伎や演劇・映画の分野で、江戸時代元禄期に起きた赤穂事件を基にした創作作品

そう感じただろう。だからこそ、メロスが、身代わりになってくれ、人質になってくれと言ったときに二つ返事でいいよと引き受けた。その時、セリヌンティウスはメロスが帰って来るか来ないかはどうでもいいはずである。もしメロスが3日経っても帰って来なかったら、もちろん自分は死ぬが、何のためにメロスが帰って来ないかはよく分かっている。それはメロスが今度こそと、暴君暗殺を再度企てて成功させるためだと。暗殺計画を成就するためにメロスは帰って来ないのだから、そのために自分が犠牲になるのだと。そういう覚悟ができている。だからメロスが帰って来ようが来まいが、そんなことはどうでもいい。むしろメロスに暗殺をさせて、自分は暗殺することを思いつかなかったことを恥じている。そう理解しなければならない。だから、もしかしてメロスが帰って来ないかもしれないと疑いを持つということは、どだいあり得ない話である。

（6）「メロス」と「セリヌンティウス」との友情、その違和感の正体
―　政治性の隠蔽、リアリズムの欠落

この話がなぜ嘘くさいかというと、この『走れメロス』という物語から一切の政治性が隠蔽されているからである。友情の物語にフォーカスして政治ということが一切カットされている。その証拠に「メロスは政治が分からぬ」と最初に書かれている。しかもメロスは単純な男であって、暗殺計画も非常にずさんで、ただ宮殿までのこのこ入って行って暗殺しようとしただけであると書かれている。こんな馬鹿げたことがありますか。相手は暴君である。相手は警戒している。秦の始皇帝のようなものである。それを殺そうとしている人間が、のこのこ宮殿に出かけて行って、ただ暗殺に失敗する、そんな馬鹿げたことがありますか。あり得ないでしょう。もっと周到に計画しているはずである。

メロスは、本当にディオニシウスを暗殺しようとするなら、彼がどのような行動を日々していて、どのようなところの警備が手薄になっているかなどを事前に察知し、情報を集めている。そういうことを積み重ね、積み重ねしていっている。それでもなお自分は本当にそれを実行する権利があるかどうかを疑うことだってある。これが本当に正義なのか。たとえ相手が暴君であっても、こういう暴力行為は違法行為である。そういう違法行為が自分に許されている、というのは傲慢かもしれない。その暴君が死んだとしても、その暴君の弟がその後を継ぐかもしれない。あるいはもっと酷いことが起こるかもしれない。メロスは当然そういうことをあれやこれやと胸の内でいろいろ考えを巡らせているに違いない。そして躊躇したり、やはり思いを新たにしたりしながら、ついに最後の決断に進んでいったに違いない。そういうことが一切書かれていない。それをメロスは政治が分からない、単純な男であったと一言で片づけるのはリアリズムのかけらもないと言える。

（補遺）

『走れメロス』の原型、シラーの物語詩に、その異同を尋ねる。

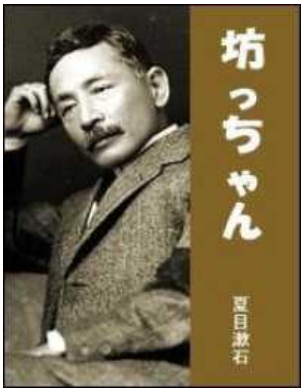
実際に、この『走れメロス』という小説は、シラー[10]の物語詩を原型にしていると言われている。シラーは物語の形でこの『走れメロス』の話を書いている。それが大正時代に翻訳され、その翻訳の文章と寸分違わない文章が『走れメロス』の中に入っている。つまり剽窃(ひょうせつ)しているようなものである。今日だったら、それは著作権違反と言われても仕方ないことである。それを太宰治は行っている。そのシラーの原作は、ローマ時代の物語を集めたものの中にある。それ自体が史実に基づくものかどうかは、分からないがラテン語の原文があるらしい。

その資料は『走れメロス』の太宰治の話とほとんど同じである。しかし、注目すべきことは、そこには、メロスは政治が分からぬとは一言も書いていない。メロスは単純な男だとも書いていない。しかも最後の芝居がかった大げさな身振り、お互いに殴り合う身振りももちろん載っていない。つまり、そういうところは全て太宰治が勝手に自分で付け加えたもので、しかも、その付け加え方に太宰治の傾向性が表われている。ローマのもともとの話に加えて、太宰治はその話を感傷的なものにすり替えている。

Ⅱ　『坊ちゃん』における「友情」を論じる。

（1）『坊ちゃん』のあらすじ。その政治的バックボーンを探る。

「坊ちゃん」という主人公、この若者が教師になって、松山の中学に赴任する。その中学で堀田（あだ名：「山嵐」）という男と友情を取り結ぶ。主要人物は、「坊ちゃん」、それからこの「山嵐」。それに対して「赤シャツ」という悪い奴がいる。それから「野だいこ」という提灯持ちがいる、それから「タヌキ」という校長先生がいる。これらが、「坊ちゃん」があだなで呼んでいる主要人物である。話しは、「坊ちゃん・山嵐連合」対「赤シャツ・野だいこ・タヌキ連合」、この二つの連合が中学を舞台に戦うものである。



『坊っちゃん』夏目漱石
（出版：グーテンベルク２１）

なぜ戦うのかというと、「うらなり君」こと古賀が「マドンナ」という女性と婚約していたにもかかわらず「赤シャツ」が横恋慕して「マドンナ」を奪い取る。その背景は、「うらなり君」は、お父さんが亡くなって家が没落して手元不如意になり、非常に貧しくなってしまう。それに対して「赤シャツ」は奏任官[11]という高い立場にいる。この「赤シャツ」とか

[10]シラー（Friedrich von Schiller：1759-1805）、ドイツの詩人、歴史学者、劇作家、思想家。ゲーテと並ぶドイツ古典主義の代表的哲学者。ベートーヴェンの第九の歌詞となった『歓喜の歌』で知られる詩人でもある

[11] 奏任官は明治憲法下の高等官の一種で、高等官三等から八等に相当する職とされていた。奏任官は天皇の任命大権の委任という形式を採って内閣総理大臣が任命していた。なお、勅任官は明治憲法下の官吏区分で、高等官の一種であった。奏任官の上位に位置し、広義には親任官と高等官一等と二等を総じて勅任官と呼んだが、狭義には高等官一等と二等のみを勅任官といった。親任官と勅任官に対しては、敬称に閣下を用いた

「タヌキ（校長先生）」などは奏任官待遇と言われ、社会的地位が少し高く、ただの中学校の先生ではない。他の連中、「坊ちゃん」とか「山嵐」はただの中学校の教師である。そうした社会的身分の差が対立を生んでいる。

「赤シャツ」は奏任官で、成功者でエリート。「マドンナ」が心変わりし、「うらなり君」を捨てて「赤シャツ」になびく。心変わりしたと言っても「マドンナ」の自由意志なので、「坊ちゃん」とか「山嵐」とか赤の他人が文句を言うのは筋違いではないか。人の恋心に対して文句をつけても仕方がないではないか。もちろん「うらなり君」からすれば、けしからんという気持ちは分かる。「うらなり君」が、自分と約束を契った「マドンナ」が他の男に気を許すのはけしからんと思うのは理解できる。しかし、直接関係のない「坊ちゃん」と「山嵐」とかが文句をつけても仕方のない話である。全く筋違いの話であり、私情でもあり、理屈に合わない話である。

その「うらなり君」は、「マドンナ」を奪われただけではなくて、遠い僻地に、延岡だったかに転任させられる。「赤シャツ連合」は、「マドンナ」から「うらなり君」を引き離すために転任させることを画策して成功する。これは、「赤シャツ」が「うらなり君」に脅しをかけ飴と鞭で「うらなり君」に言うことを利かせたと「坊ちゃん連合」は思っている。本当は分からない。しかし、少なくともそのように思っている。でも、「うらなり君」は、はっきりした意思を表していない。最終的には「うらなり君」は、「赤シャツ連合」の申し出を受けて延岡に行くことを承諾している。

「坊ちゃん連合」がなんと理屈をつけようが、「うらなり君」が承諾したことであり、「マドンナ」を奪ったと言っても、「マドンナ」自身の意思で「赤シャツ」とくっついている。これに「坊ちゃん連合」が文句をつけるような話ではない。それにも関わらず、「坊ちゃん」は、けしからんとして「赤シャツ」と「野だいこ」をめちゃめちゃに暴力制裁する。もちろん、これは暴力制裁なので違法行為であり、暴行罪、暴行傷害罪に当たるはずである。法的に違法行為だし、倫理的にも正当性があるのか怪しい。結果的には「赤シャツ」と「野だいこ」は、ぶちのめされるが、めでたく「マドンナ」と結婚して、「赤シャツ」はその後出世を遂げる。「山嵐」はクビになる。「坊ちゃん」は「山嵐」に同情して自分から辞める。こうして「坊ちゃん連合」は敗北する。「うらなり君」はもちろん延岡に飛ばされる。

（2）法的・社会的敗北者を救う文学。その論理

結果を見ると、この闘争では明らかに「坊ちゃん連合」が敗北している。完全敗北に終わっている。しかも敗北しているだけではなくて、理があるのかどうかも多少疑わしい。社会的には「坊ちゃん連合」は敗北した。しかし、文学はそれを救う。法的に、あるいは社会的

に敗北した人たちの立場を文学は救う。どういうことか。

まずこの「坊ちゃん」と「山嵐」たちが「赤シャツ」に対して、彼らのイデオロギーを暴き出すような働きかけを行っている。確かに表面上は「赤シャツ」たちはそんなに酷いことは言ってはいない。例えば、「坊ちゃん」が赴任して来たときに、「タヌキ（校長先生)」が次のような教訓話をした。

「それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれはとんだ所へ来たと思った。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたような無鉄砲なものをつらまえて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化を及およぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遥々こんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩の一つぐらいは誰でもするだろうと思ってたが、この様子じゃめったに口も聞けない、散歩も出来ない。そんなむずかしい役なら雇う前にこれこれだと話すがいい。おれは嘘をつくのが嫌いだから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断って帰っちまおうと思った。宿屋へ五円やったから財布の中には九円なにがししかない。九円じゃ東京までは帰れない。茶代なんかやらなければよかった。惜しい事をした。しかし九円だって、どうかならない事はない。旅費は足りなくっても嘘をつくよりましだと思って、到底あなたのおっしゃる通りにゃ、出来ません、この辞令は返しますと云ったら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知っているから心配しなくってもいいと云いながら笑った。」(『坊ちゃん』から引用)

これは「坊ちゃん」の立場から校長の言動をつぶさに観察して、あたかも素朴な立場から見たままに言っているように見えながら、そうでもない。かなり意地悪な目で見ている。

校長の説教の背後にあるのは、一種の儒教的人間観、儒教的教育観である。つまり、徳のある者が、何も言わなくてもその美徳ゆえに人に影響を与える。徳化である。そうして下々の者は何も命令されなくても、権力者の言うとおりになるものだという、徳によって人を動かす、徳によって政治をするという、そのような政治観、倫理観が背景にある。それ自体は立派なものだが、もはや形骸化している。単なる偽善でしかなくなっている。そのことを、この校長の話は暴露している。つまり、表面では徳によって生徒に影響を与えると言いながら、実はそのようなものはお題目にすぎない。そのことを、校長自身が明らかにしている。

しかも、後々、この赤シャツが野だいこと一緒に芸者遊びをしている場面がある。坊ちゃんがそれを押さえる。芸者遊びをすることを一方でやっておきながら、徳によって生徒に影

響を与えなければならないという、この偽善的なふるまいが、彼らのイデオロギーの本性である。つまり、「赤シャツ連合」が持っているイデオロギーは非常に欺瞞的である。実際には権力を持って、お金を儲けるとか、そのような現世の力によってマドンナ」を奪い取って、しかもうらなり君を左遷させる。左遷しておきながら、うらなり君に対して凛然たるにらみを利かせて、それを自分の意思であるかのように言い繕っている。「うらなり君は自分から転任するのだ」と、タヌキ（校長先生）だとか赤シャツは言っている。

うらなり君は「はい分かりました、行きます」と言っているだけで、相手に脅されて言うがままになっている。うらなり君は自分の意思で転任すると言わざるを得なくなっている。坊ちゃんはそれを赤シャツに問いただす。「給料を上げてやるのを承知したのは、うらなり君が自分の希望で転出するという話だったからだ。うらなり君は全く自分の希望で転任するのだ」と赤シャツは言う。ところがそうではない。「ここにいたいのです」、と坊ちゃんは抗議する。しかし、「それは誰の話ですか」と赤シャツが言う。しかし、これはうらなり君自身から聞いたのではなく下宿のおばあちゃんから聞いた話なので、坊ちゃんとしては根拠が薄弱である。うらなり君自身の意思が本当にどうであるのかを、うらなり君自身が証言しているわけではない。

仮に、「うらなり君、君の本心はどうなんだ」と聞いたところで、うらなり君は赤シャツたちから脅されているので本心を言えない。「もしこの件について文句を言うのであれば、君の昇給はないよ」と言われている。そうすると「赤シャツ連合」は、本当は権力を行使しておきながら、自分の権力によって人を動かしているとは見せない。「うらなり君は自分の意思で動いているだけだ」と。自分の権力によってどうのこうのさせているとは見せていない。

積極的に権力を行使したら、なぜそのように行動するのかの説明責任が生じる。アカウンタビリティが生じる。そういう説明責任を赤シャツは行使できない。というのはマドンナを自分のものにするためだけだから。だから、このように権力者が自分の隠然たる権力を行使しておきながら、それはあたかも権力がない者の方が自分の意思でやっているだけであるかのように取り繕っている。今の言葉だとハラスメントに当たる。本当は嫌々なのだが、うらなり君の自由意志であるかのように取り繕っている。そういう形で隠然たる権力を行使する。これが赤シャツ、野だいこたちのやり口である。それが「坊ちゃん連合」には分かる。しかし、分かって、そうであるに違いないと言っているだけで、本当にそうかどうかは、うらなり君」に確かめていないので実証できない。「坊ちゃん連合」は実証することが難しいことを推測しているにすぎない。

（3）「坊ちゃん連合」が「赤シャツ連合」の真意を見透かすことができる理由
―　「敗北者連合」としての政治的バックグラウンドの存在

「赤シャツ」だとか、「野だいこ」、「タヌキ（校長先生）」の建前上は一応とおる話を、「坊ちゃん連合」は、建前上はそうだが本当は違うとなぜ認識することができるのか。なぜそのような認識能力を「坊ちゃん」たちは持つことができているのか。それは、実は政治的なバックグラウンドがあるからである。つまり、「坊ちゃん」・「山嵐」は敗北者連合である。初めに「坊ちゃん」の出自が明かされる。彼はもともと旗本[12]の出で、幕藩体制の下での子弟で、しかも次男である。次男は家督相続はできず、しかも親からも疎んじられる。父親からも母親からも「坊ちゃん」は疎んじられている。愛されていない。人生の初めから敗北を余儀なくされている人物として出発している。

この「坊ちゃん」が向こう見ずなことをして、屋根のてっぺんから飛び降りて足をくじいたりしているのはなぜか。自分自身が愛されていない、そういう敗者の立場に、つまり自分自身の存在意義に納得していないからである。自分自身の存在に納得できない境遇の人間、これが「坊ちゃん」の向こう見ずさを生んでいる。それをただ見守るのは清という婆やだけである。清は旗本のさる大家の娘である。ところが、明治維新のときに、やはり没落して、女中奉公に出るしかない、そういう身分に下落している。この清という人物に「坊ちゃん」は大事に育てられる。父親や母親から見捨てられても、清だけは「坊ちゃん」のことを認めている。なぜ認めているのか。それは「坊ちゃん」が器用にこの世の中を泳いでいくことができない性質だからである。これを「よいご気性」と清は感じている。つまり、敗北を余儀なくされている者の生き方こそ、清にとってみれば「よいご気性」である。気持ちのすっきりした清らかな人間である。「よいご気性」の人間は、世の中を器用に渡っていけない。「坊ちゃん」はそういう人間だと、清からは見えている。

なぜそう見えているかというと、彼女自身が敗北者だからである。敗北者から見ると世の中を器用に渡っている人間が、いかにずるいことをやっているかがよく分かる。そういうずるい人間というもののずるさを持っていない「坊ちゃん」を、「あなたはよいご気性です」と言って、評価して育てている。

「山嵐」はどういう男かというと、会津藩の出身であり、もちろん敗北者だが、対して赤シャツはこの世の中をうまく渡っている。たぶん赤シャツはイギリスに洋行して英文学をやっている。最先端の知識を洋行で得て出世街道に乗っている。明治政府と結託したこのような「エリート連合」と対決するという政治的な対決姿勢が坊ちゃんたちの裏側にある。初めから敗北を余儀なくされている連中が、世の中をうまく渡る連中の欺瞞性を見抜くとい

---

[12] 江戸時代、将軍家直参で、1万石未満、御目見(おめみえ)以上の武士

う話である。

（4）「坊ちゃん連合」によって暴き出される「赤シャツ連合」の欺瞞性
―　「理由付けの事後性」の論理を、そこに見る。

「エリート連合」のごまかしをいかに暴いたところで、「敗北者連合」が敗北することに変わりはない。ターナーだとかゴーリキーだとか、その当時誰も見たことも読んだこともない西洋の芸術とか文学とかを「赤シャツ」はひけらかす。「坊ちゃん」から見れば、それはただの見せかけであって、底の浅いものであることは分かる。分かるが、近代化そのものについては反対することはできない。「坊ちゃん」であれ「山嵐」であれ、中学校の教師として明治の近代化を推し進める立場にある。そういう立場からはイデオロギー的にも近代化を推し進めている羽振りのいい人たちを否定することはできない。だからイデオロギー的にも彼らは敗北していく。敗北していくが、むざむざと敗北して、何も手出しできないゆえに、暴力で、テロに訴えかけるのかというとそうではない。つまり彼の暴力行為は単なる絶望から行われたテロリズムではない。

どうしてそのようなことが言えるのか。「うらなり君」の件が権力者によるハラスメントか、ハラスメントでないのかを明らかにするために、彼は「赤シャツ」、「野だいこ」を叩きのめす。もしそれが、不法なもので、正義にもとる行動であれば、必ず彼らは警察に訴えるであろう。ところが、彼らが訴えない。やはりあいつらは後ろめたいところがあったのだとして、結果的に彼らの不正が証明される。つまり彼らは不当な暴力行為を受けてもそれを警察に言わなかった。そのことをもって、やはり「赤シャツ」はハラスメントをしていたにすぎなかったことが事後的に証明される。

普通は逆である。正しいことを証明してから正しいことをする。ここでは、そうではない。行動してから、その結果によって正しいことが証明される。つまり理由に先んじて行動がある。行動の結果、その理由が明らかにされる。つまりこのことによって「赤シャツ連合」の不当性が明らかになる。「坊ちゃん連合」の正義が明らかになる。そういう構造になっている。もちろん、売春宿に通っている「赤シャツ」、「野だいこ」はそれが明らかになると都合が悪いというので、伏せたのではないか、つまり警察に言わなかったのではないかという説も成り立つようにも思われるが実はそうではない。つまり売春はそれほどほめられた行動ではないにしても、決して違法ではない。当時、違法なものではなかった。しかも、その当時はスキャンダルになるほどのことですらなかった。「赤シャツ」が警察沙汰にすることを伏せたのは、ただ「マドンナ」の事件が明らかになることを避けたということにある。つまり「マドンナ」との婚約が破棄されることのないよう警察沙汰にするのを避けただけである。

このロジックはどういうことか。つまり先駆的な行動があって、その理由付けが事後的に

なされる。理由付けの事後性ということである。時間構造が逆転している。理由に基づいて行動がなされるのではなくて、行動が理由を生むという構造である。政治的行動はそのようなものである。

（5）「理由付けの事後性」と信仰。「坊ちゃん連合」との相似

政治的行動は信仰に似ている。なぜ信仰に似ているかというと、信仰するのも理由付けが不十分なところで信仰しなくてはいけない。はっきりした証明がなされ、「あ、神が存在するのか、では神を信じましょう」となるわけではない。神が存在することの証明を理解するためにも、既に信じていなければいけない。

つまり、ある行動へと前のめりになることによって、初めてその理由付けが理解されてくる。行動が先行して理由は後付けという構造が、政治的な場面と似ている。政治の場面も、それが本当に正義なのかどうかはやってみないと分からないところがある。初めから全てこれが正しいに決まっているのであれば誰でもやれるが、やはり暗殺が正義であり得るのかどうかは分からない。そういう前のめりな行動をして、結果が正しいかどうかは後になってみないと分からない。だから大きな失敗をしてしまう危険ももちろんあるわけである。

信仰の場合について、アヌイ[13]という劇作家が、『ひばり』という劇を作っている。『ひばり』というのはジャンヌダルクの劇である。シャルルという権力を持っていない王太子に対し、王位に就くよう努力するというのが、ジャンヌダルクの歴史物語である。権力がないために自分が暗殺される危険があると感じているシャルル王太子は、白痴のまねをする。白痴のまねをして皆から馬鹿だと思わせて危険を避けるようにふるまう。そこにジャンヌダルクは面会に行って、「勇気を持ちなさい、勇気を持ってあなたが一歩踏み出せば必ず神様が助けてくださる」と説得する。

そのときに、「ただし、最初の一歩は人間から歩まなければなりません、最初の一歩は我々人間が歩み出すことを神様はお望みです」と、ジャンヌダルクは説得している。つまり、最初の一歩を歩んだ人間のみが、この信仰のリアリティを、神様の助けというものを感じることができる。神様を信じるための理由が十分にあって、それで信じるのであれば、これはなんの意味もない。当たり前のことである。理由がはっきりしていない。はっきりしていないが、半歩、一歩踏み出したときに初めてその理由が分かる。さらに2歩目を踏み出したらもっとはっきり分かる。3歩目を踏み出したらいよいよそれが確実になってくる。こういうふうに理由は後からやってくる。

---

[13]アヌイ（Jean Marie Lucien Pierre Anouilh：1910 - 1987）は、フランス出身の作家・脚本家・劇作家。パリ大学中退後に、ジロドゥーに傾倒し劇作を志す。非常に多作であり、多様な戯曲を遺している

ブレーズ パスカル
Public domain,
via Wikimedia Commons

同様にパスカル[14]がそういうことを書いている。信仰のために証明を求める人がいるが、それはお門違いだと言う。結局どのようなことを証拠として持ち出しても、我々は不信心者を説得することはできない。説き伏せてしまうことなどできない。また、どんなことを持ち出しても不信心者が我々を説き伏せることもできない。十分な理由で信じたり、信じなかったりすることは、どちらもできない。だから十分な根拠はないのだということを言っている。十分な根拠がないことこそが我々の説得力なのだ。つまり、我々が十分な証拠があるからこれを信じなさいと言うのではない。キリスト者は「十分な証拠があるから神を信じるしかない」とは言わない。不十分な証拠しかないと言っている。不十分な証拠しかないことを根拠に我々は人を説得すると言っている。そのように不十分な根拠しかないと言うのは我々（キリスト者）だけだ。我々はまさにそのことによって人を説得する。どのような証明も、証明としての根拠は十分でない。そのことを認識することによって我々は信仰を証明している。

信仰の証明とはそういうことであって、自由と両立するわけである。もし完全に信仰の正しさが全て証明されるものであれば、信仰する自由はないことになる。信仰へと強制されるしかない。我々は信仰へと強制されるのではない。自由意志によって飛躍する。飛躍することによって信仰を固める。根拠があって信じるのではなくて、信じることによって根拠を理解していく。これは「坊ちゃん連合」の行動と似ている。理由付けの事後性ということである。

（補遺）

「数学の証明」にも見られる「先駆的な行動」と「事後的正当性」

先駆的な行動と事後的正当化の典型的な例は、政治的な行動と信仰の場合のほか、「数学の証明」の場合にも似たようなことが起こる。「幾何学の証明」は解かれてみると、なんだ、そんなことかと分かるのだが、それ以前に、ここに 2 つの線を引けばいいというようなことを思いつくわけではない。そこに引く理由があって引くわけではない。線をたまたま引いてみて、それによっていろいろと分割され、そのことによって例えば、三角形を 10 個作り出して、たまたまこれが正解だったと分かる（下図参照）。「数学の証明」というのは、それをやるための理由があるからそれをやるのではなくて、やってみたらそれが証明としての意義を持つ。正当化は後から付いてくる。そのように数学の事例に関しても、それが引かれるべき線だったということの正当化は、その証明が与える。つまりそれがなされないとそこ

[14] パスカル（Blaise Pascal：1623 -1662）は、フランスの数学者・物理学者・思想家。円錐曲線における定理の発見、計算器の考案、トリチェリの真空実験の追試の成功に基づくパスカルの原理の発見や確率論の創始など、多くの科学的業績を残した

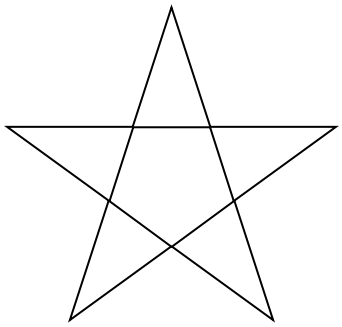
に補助線を引くという理由が分からない、そういう認識になっている。

実際ヘーゲル[15]という哲学者は『精神現象学』の序論で、数学的認識についてケチを付けている。数学的認識はその線をなぜ引くのかは分からない、つまり理由のない線を引いてみて結果的にそれが認識になる。その根拠に基づいて論述が進むわけではない。後からその論述の理由がつけられる。その点では、哲学的認識より数学的認識の方が一段劣ったものだ、というようなことを書いている。

ヘーゲル
Alte Nationalgalerie, Public domain, via Wikimedia Commons

しかし、それはヘーゲルの方が間違っている。本当は、論述というものは後から正当化がついてくる。理由というものに基づいて証明なり認識なりがなされるのはごく一部で、あるいは見掛け倒しである。理由に基づいて何かの行為がされるのではなくて、行為に基づいて理由というものは生まれている。

問題：この星形図形に直線を
2 本だけ引いて小さな三角形を 10 個作り出せ。
ただし、ここで「小さな三角形」というのは、
その内側に分割線が入っていない三角形をいう。
（例えば左図にはすでに 5 個だけ「小さい三角形」がある）



[15]ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel：1770- 1831）は、ドイツの哲学者。フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte：1762-1814）、シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schellin：1775-1854）と並んで、ドイツ観念論を代表する思想家である。18 世紀後半から 19 世紀初頭の時代を生き、領邦分立の状態からナポレオンの侵攻を受けてドイツ統一へと向かい始める転換期を歩んだ

質疑応答

Ｑ１　「友情」が成り立つためには、独立した「自我」が前提となるのではないか。
Ｑ２　「友情」と「ホモセクシャル」、あるいは「恥」の感覚との関係はどう理解すべきか。
Ｑ３　「友情」の本質、あるいは定義を、どのように考えているのか。
Ｑ４　「友情」は、特定の社会層において成り立つものとするのは、暴論ではないか。
Ｑ５　「友情」に定義の必要はなく、100 人 100 様でよいのではないか。
Ｑ６　「メロス」によって「暴君」が「暴君」から救出されたとすることはできないか。
Ｑ７　西洋的でなく、日本的な政治性が支えとなる「友情」もあり得るのではないか。

Ｑ１　「友情」が成り立つためには、独立した「自我」が前提となるのではないか。

友情という概念は日本においていつ成立したのか。友情は、私と君、僕と君の間の関係で、私とか僕という概念が成立していなければ成り立たないのではないか。自我の輪郭が明確でないと無いのではないか。

『走れメロス』に違和感を抱かれたのは、そこに、政治的背景の描写が欠けているからというお話だったが、むしろ、主語が大変明確で、メロスは何々した、というのがやたらと出てくる。これがあまり日本人の文章らしくないのではないか。日本人の文章は、トンネルを抜けるとそこは雪国だったというような表現、これを欧米語に訳すと、私がトンネルを抜けたらそこに見えた景色は雪国だった、という表現になる。日本人の文章には、私がというのと、そこに見えた景色はという、そういう主語がない。ところが、『走れメロス』はやたらと主語が、日本語としては不自然なくらい明確に出てくる。そこが日本人らしくなくて、それが日本人の小説としたら嘘っぽい感じなのではないか。

（田島）

自我がはっきりしていないところに友情は芽生えないのではないか、独立した自我があり、お互い尊重し合うような人間関係がないところでは、友情が友情として育たないという意見は誠にごもっともである。

日本史の中でどこから友情が明確な形で芽生えたか、あるいはまだ芽生えてないかは難しい問題だが、一つは、武士階級が歴史上に登場するところから友情ないし友情に似たものが生まれてくるような気がする。武士はやはり一所懸命で、その土地に命を懸け死をかけて戦うという形で、自我が独立してこざるを得ない、そういう契機を持っていると思う。

例えば、平氏の公達と源氏との闘いがあって、その時に熊谷直実が相手の武将を取り押さえる。それがあまりに若くて美しい武将だから逃がそうとした。けれども味方が寄せてきたため、どうしてもその首を取らざるを得なかった。平敦盛である。平敦盛と熊谷直実との間には一瞬ではあっても、友情に似たものが生まれている。相手に対する尊敬というか、尊重、

あるいは憧れといってもいいような感情。つまり直実は非常に無骨な勇猛果敢な武士であるが、他方、敦盛は華奢で美しくて若くて貴族的な若者である。自分とは違った価値がそこにあることを直実ははっきりと感じて、それを尊重したい、それに生きていてほしいというふうに感じる、そのようなセンシティビティを持っていた。後に、蓮生入道として階を授けられるような立場になる。

したがって、武士階級の中に、あるいは武士階級が勃興してくる中には、人格は人格として尊重し、そういう人格同士の間に友情といってもいい関係が成り立つような瞬間があったのではないかと思う。だから戦国時代より前に、おそらく平安時代のいずれかの時点で、一所懸命を生きる武士団たちの間には、あるいは初めは主従関係のようなものに隠れていたかもしれないが、実は友情といっていいような関係が成立したのではないかと考えられる。

主語と述語の明確な言語がなければ明確な自我が成立しないとは必ずしもなくて、もちろんそのような面があるのかもしれないが、例えば『源氏物語』を読んでみても、主語と述語があまりはっきりしないような形で書かれているが、自我というもの、特に女君達の自我は明確に、非常に際立った形で表れている。

例えば六条御息所の人柄だとか、あるいは空蝉という受領階級の奥方であるが、その空蝉というのは身分が低いにも関わらず、源氏に対して自分自身のプライドを守り続ける、そういう女性として登場する。夕顔のように希薄な自我しかない女君もいるが、それはそれでまた個性的である。夕顔だとか紫の上とかはどちらかというと自己主張があまりはっきりしていない女性たちとして描かれているが、身分が高い六条御息所のような女君も身分の低い空蝉のような女君も、それぞれに自己主張という点では遜色のない形で自分自身の自我を押し出して生きていらっしゃる。そういう意味では主語述語関係が明確でない日本語を駆使しても、その中で生きられた自我の姿はあると感じる。

Ｑ２　「友情」と「ホモセクシャル」、あるいは「恥」の感覚との関係はどう理解すべきか。

『走れメロス』の「友情」に違和感を覚えるのは、感情の認識が我々とは少し違うためなのかなと思う。例えば、平家物語などもそうだが感情が激しい。江戸時代のような感情を抑える文化ではなくて、泣いたり、わめいたりで、相当激しい。先生のご著書に、男性との友情関係が深まったため、女性との関係はどうなってもよくなったという文章がある。武者小路実篤もそうだが、我々が思うより相当激しい、修道的ホモセクシャリズムのようなニュアンスもあったのではないかと思う。

行動があって云々とのお話、「山嵐」一派に、「坊ちゃん」が恥をかかせた。恥を知れという感覚を入れると、少し「坊ちゃん」の行動が理解できる。「赤シャツ」は、恥をかいたという思い、屈辱感というか、西洋の人間とは違う価値観というのか、そういうこともあったのではないか。その辺を丁寧に読み解いていったらどうか。

（田島）

まず友情とホモセクシュアルの関わりがある。それはギリシャの中にも友情とホモセクシュアルのつながりがあって、これをどこまで本気で考えるかは微妙だが、おそらく兵士として戦う間の戦士の友情がホモセクシュアルの起源になったということは、ギリシャの場合には大いにあることだと思う。

熊谷直実の平敦盛に対する感情も、なにかホモセクシュアルを思わせるところがある。それは兵士同士の友情というものが、一方でホモセクシュアルに似たような感情につながるところがあるのだと思う。実際どうなのかはなかなか難しくて、断定はしにくい。

だが、私の勝手な思い込みからすると、ホモセクシュアルと戦士的友情とは本当は異質なものなのではないか。というのは、これはあまり一般化はできないが、私の友人のピアニストがホモセクシュアルな人と付き合った経験がある。男性ホモセクシュアルの人と付き合っていて、つまり彼女は男性ホモセクシュアルの彼氏を持って、いわばカモフラージュとして付き合っていたのだが、そのためにフランスの音楽家の中におけるホモセクシュアル社会を非常に詳しく追及することとなった。

その人の話を聞いて、そこから推測する限りにおいてでだが、ホモセクシュアルの、少なくとも男性ホモセクシュアルの関係というのは、異性的な恋愛関係よりも一層孤独で、一層懐疑的で、相手に対して嫉妬深く、ねちねちと嫉妬に基づく探求をする、追及をする。

つまり男性ホモセクシュアルの関係は異性的な恋愛関係よりも壊れやすい、非常にもろくて、次から次へ相手を変えていく。そういう運命に普通はあって、だから恒常的であることは難しい。恒常的であることが難しいのは恋愛関係にその点はより似ているというか、恋愛関係以上に fragile（壊れやすい、もろい）で、それだけ相手に疑心暗鬼で相手に関心を向けざるを得ない、そういう関係だというふうに私の狭い見聞からは思われる。

それは実際プルーストの小説の中で描いているホモセクシュアルの分析と非常に近い。つまりプルーストは実際にホモセクシュアルの世界に生きていたが、その中でソドムの男とゴモラの女というホモセクシュアルの人たちというのは非常に壊れやすい人間関係で、一瞬の快楽を追及する、そういう生き方をしている。

こういう生き方と非常に対極的にあるのが兵士的な友情だと思う。兵士は老兵になるまでずっと同じ兵隊兵団として生きる。その中で信頼していくことが求められる。典型的なローマのレジオンといわれる兵団、百卒長に率いられる 100 人の集団だが、そういう兵隊は、どこまでも常に 100 人で一緒に行動していくという老兵の集まりになる。そういう人間関係はホモセクシュアルの非常に瞬間の中に燃焼するような恋愛関係とはむしろ対極にあると私には感じられる。

恥の問題は非常に強いと思う。友情と恥の関係は非常に強い、深く関係していると思う。恥は半ばパブリックなものである。つまり愛情のように完全にプライベートな問題ではなくて、恥をかいたり、名誉を守ったりというのは、非常にパブリックな価値がある。だから武士は恥をかかないようにするとか、名誉を守るとかというパブリックなところに生きて

いるわけである。友情は恥をかかないで名誉を守る、相手の名誉を重んじる、そういうところに成立するものなので、愛情関係とは違う。愛情の場合は、恥も外聞もなく相手にすがりつく。だから名誉心に裏付けられた人間関係、これは少しそれを延長していけば政治的関係につながる、そういうものだと思う。

漱石には明らかに士族的な恥の感覚が強くあった。名誉心を彼は人一倍強く感じている人間である。もちろん彼には愛情もあるが、愛情に対しては人一倍懐疑的ではあった。特に女性との人間関係という愛情に対しては非常に懐疑的であった。

Q３　「友情」の本質、あるいは定義を、どのように考えているのか。

先生のお考えになる友情の本質、若しくは定義を、できるだけシンプルに教えていただきたい。

（田島）

友情には政治的関心が不可欠だ、という側面を強調しただけである。友情というのは、ある友人の二人関係、二者関係と捉えられがちであるが、決してそうではない。つまり友人と二人の関係はそれを取り巻く雰囲気というか、友達集団というか、つまりその二人の関係を見ている人たち、これはピア（peer）というのか、同族、同じ身分というのか、同じように尊重し合う人たちから見られている二人である。つまり恋愛関係のように、たった二人だけの世界を作るのではなく、友情にとって本質的なのはこの第三者である。第三者、これもいわゆる庶民というか、その他大勢というのでは不十分である。つまり観客も自分と同等の身分の、あまりいい表現ではないが貴族的な仲間が必要だということである。つまり友情にとって本質的なのは、あまり強調したくはないが、貴族的な雰囲気である。

つまりお互いにリスペクトするというが、その才能を買うだけではない。何かその人の生い立ちだとか、そういうものを含めた貴族的な雰囲気が実は必要である。だからその他大勢の人たちの間には友情はない。労働社会での友情はなかなか難しい。奴隷たちの間には友情は不可能、そういうものだと思う。つまり尊重する人たちから見つめられて名誉を重んじる人たちの間で初めて成立するものである。これが本質かというと、そんなことはないと思いうが、とかく軽視されている面である。

実はそこが非常に重要で、そういうバックグランドがなくなった砂粒のような個人が生きている世界だと、友情はどだい文化として成立しない。だから名誉心は非常に大事だ。自分が負っている、文化的なバックグラウンドであり身分的な武士階級だとか貴族であるという名誉心が、実は本人達は意識していないが、それが必要だと思っている。

Q４　「友情」は、特定の社会層において成り立つものとするのは、暴論ではないか。

正義について難民高等弁務官の緒方さんがいみじくも言っておられたが、あのような仕事をすると、正義という言葉が使えない。というのは立場によってどちらも正義だと言って殺し合う。友情も同じだと思う。よく友情とか信頼を裏切られたと言うが、一方は裏切った

かも分からない、しかし他方は裏切ったつもりはない。そういう関係がよくある。本質が何かということに関して、身分とか経済的裕福さとか、それが低ければ育たないというのは暴論だと思いうが、どうお考えか教えていただきたい。

（田島）

そうだからこのような表現は使いたくなかった。全くそのとおりだとしか言いようがない。正義の話でも友情の話でも、少し、美の話と似ている気がする。認識には、まずパターンで認識する方法がある。机はこういうものだというパターンがあって、そのパターンに当てはまるのが机ということになる。そうすると机の定義が可能になる。机であるための必要十分条件が何であるかが求められる。そういうパターン認識で認識をする場合と、美のような場合とでは、認識方法がかなり違うと思う。というのは、美しいと感じる時には、花が美しい、女性が美しい、音楽が美しいとか、様々なものについて美しいと判断するが、共通のパターンがあるのかというと、これはない。共通のパターンによって我々が美を認定するわけではない。だからパターン認識と美的認識とは違う。

同じように、正義だとか友情というものもパターンがあるわけではない。だから美しい友情だとよく言われるように、友情は美のようなものである。だから、ああこの人とこの人のこういう友情もあったのか、ああ、こういう友情もあったのか、というふうに我々は全然違うパターンを、これも友情、あれも友情と感じる。そこに友情の基本パターンを定義するという形で友情にアプローチするのは、必ずしも友情に対する適切なアプローチではない。だから物事には定義という形でアプローチして明確化していくことがふさわしい対象もあるが、必ずしもそうではないような対象もたくさんある。友情というのはかなり特殊で、パターン認識にうまく乗らないものなのではないかと思う。

Ｑ５　「友情」に定義の必要はなく、100 人 100 様でよいのではないか。

友情というものをあえて定義付けする必要はないのではないか。100 人いたら 100 人の友情があってもいいのではないか。多様性があって初めて友情だと言えるのではないだろうか。夏目漱石の『坊ちゃん』の友情もまた友情だし、太宰治の『走れメロス』の中の友情もまたこれ友情でいいのではないか。読む人がおかしな友情だなと思うのもまた友情でよいのではないか。これは俺の感情に合致するな、感動するなと言うのだったらそれもまた友情ではないか。というのは友情を定義付けしてしまうと 100 人ここにいたら 100 人が皆友達になってしまう。友情を持てるようになる。しかしそれは不可能である。ここに 100 人いても、この人とこの人とは友情を持てるが、後の人は普通の友達だという形になってしまうのではないか。そういう友情でいいのではないかと思ったのだが、いかがか。

（田島）

そうは、私は考えない。実はここが議論の分かれるところであると思う。美しいというのはいわゆる普通のパターン認識ではない。同じように普通のパターン認識ではない概念の例として、偉大さという概念を考えていただきたい。偉大さという概念は、これまたパター

ン認識しにくい概念だと思う。

どういうものが偉大なのかと言ったら、でっかいことを成し遂げたやつだとか、あるいはすごく有名になったやつだとか、発明、発見をしたやつだとか、いろんなことがあるかもしれないが、また、スポーツマンとして偉大だ、学者として偉大だ、などいろんな方向がある。それぞれの道を究める点で似てはいるが、しかし偉大さというのは全く新しい偉大さも生まれ得る。これまでのパターンとは全然違った偉大さが生まれてくる。あれ、こんな偉大さがあるのかと驚くような形で偉大な人間がまた生まれてくる。そういう意味では偉大さは美に近い。つまり偉大さのパターンを我々は把握しにくい。あらかじめ定義できたり、評価基準を定めたりできるものは、大して偉大ではないものだ。どこが偉大なのか我々の理解を超えているようなものこそが、本当に偉大なもの。偉大さというものを、偉大さの前に感動したり、平服したり、感服したりするという気持ちは我々の中にあると思う。誰しもそういう偉大さに心を打たれるところはあると思う。

私としては非常に申し上げにくい、つまり一般民衆というものの間には友情は難しい、というような差別的なことを申し上げた。しかし、これは、友達というものに対しては感服することが必要なわけで、その友達の前に、俺はこれは本当に偉大なやつだと思うという感服があって、つまりそういう種類のリスペクトや感動があって、友情が芽生えるというのが普通だと思ってのことである。

だから敵同士の間に友情が成り立つということはしばしばある。シーザーとブルータスは敵です。敵であってもお互いに感服するところがある。しかし、もしそうだとするならば、偉大さが全くない連中というのか、つまり矮小な人間同士の間で友情が成り立つかということです。私は成り立たないと思っている。矮小な人間がお互い感服することはない。お互いに相手の存在に敬服することがないからである。

私はだからそこで差別的だと思う。友情というのは相手を差別する。つまりいい人であるだけでは不十分。この人たちはいい人、いい人だけど友達ではないという人はいっぱいいる。それは感服することがないから。みんないい人で親切でもある。私にとってすごくよくしてくれる、それでも友情がそこに成り立つかというとそれは別の話である。

私に危害を加えるブルータスみたいなやつがやってきてブスっと刺すかもしれない。でもブルータスのことは格別である。ブルータスには感服する、シーザーが。そういう意味ではブルータスの中には偉大さがあるわけである。シーザーはもちろん偉大な人間である。違いがあっていいのだが、なにかしら偉大でなくてはならない。そういう意味では、Distinguished（目立った，際立った）な 、選ばれた者の間にこそ友情は成り立つと、私は申し上げたい。だからすべての間にそれぞれの友情があるというふうには思わない。矮小な人間、奴隷たちの間には友情はない、そういうふうに言うしかないのではないか。

Q６　「メロス」によって「暴君」が「暴君」から救出されたとすることはできないか。

『走れメロス』は非政治化したストーリーだとのことだが、王を暗殺しようとしてメロス

が現れたときに暴君が歓喜したという。自分がこれまで非道な政治を行ってきたのは、自分が襲われるかもしれない、世の中に対して自分は非常に脅威を感じているのだということを、恐怖政治によって、そういうことが起きないようにしていたが、実際に暗殺者が現れた、ということで驚喜したと思う。

『走れメロス』の最後はその暴君が二人の若者と抱き合うところで終わるが、要するに暗殺によらずしてその暴君を暴君から救出した。ある意味では政治的な成功劇の様相を呈しているわけでだが、これについてはどのようにお考えか。

（田島）

そういうことをお考えになるのはよほど、お心が清らかで高邁な方だと思う。私はそれほど高邁な人間ではないので、とても暴君が驚喜したとは思えない。この中で描かれている暴君は、結局矮小な人間だと思う。暴君というのはそういう立派な人間が現れて自分を殺してくれることを待っているような、そういう高潔な人間ではありえない。

そういう高潔な人間はどういうふうに生まれるかというと、孤独には生まれない。高潔な人間は高潔な人間たちとして生まれる、そういう高潔な人間集団というものが初めて高潔な人間を生みだすのであって、孤独なまま高潔な人間が生まれるという話は聞いたことがない。これはシェークスピアのマクベスを考えていただくといい。シェークスピアのマクベスはどういう人間かというと、決して高潔な人間ではないし、悪辣な人間でもない、矮小な人間である。つまり暴君になるのはああいう矮小な人間である。心が狭くて、しかも度量が小さくて、器量がない。

スターリンなんかもそうだと思う。スターリンとマクベスに共通するようなことは一体何か。これは矮小さである。非常に矮小で、小心翼々として、勇気も何もない。そういう人間が最も暴君になる。だからそうでない人間が暴君の道を歩むはずがない。だからディオニシウスが改心するはずがない。だからメロスが現れても、誰が現れても、ディオニシウスを改心させることは決してできないだろう。なぜなら矮小な人間は高潔な人間を理解しないからである。高潔な人間だけが高潔な人間を理解する。したがって、友情が可能なのは高潔な人間同士の間だけである。矮小な人間は決してそういう高潔な人間を理解して、自分自身が高潔に生まれ変わるということはありえない。私はどっちかというと矮小な人間に近いのですかね。高潔さが若干不足しているからそのようにペシミスティックに思うのだろうか。

Ｑ７　西洋的でなく、日本的な政治性が支えとなる「友情」もあり得るのではないか。

仮に、シラーの作品を太宰治があえて『走れメロス』という作品にして、つまり西洋的なものを東洋的なものに移行させ、その中でメロスは政治がわからないとか単純であるとかいう修飾語を意図的に付けたとするならば、そこでの『走れメロス』における政治性は、どちらかというと日本、いわゆる西洋とは差別される日本的な政治性というものをテーマとしているのではないか。

もしそう解釈するならば、いわゆる西洋的な友情とは区別されるようなものが日本的な政治性の支えとなるのであり、そういうようなものを諭すような作品として理解できるのではないか。

（田島）

面白い話だと思う。まず目的合理的にメロスが権謀術数な人間であり、セリヌンティウスを完全に犠牲にしても、とにかく自分の政治的な目的をやり遂げるだけであって、友情などどうなっても構わないというような、強烈な政治意思を持った人間、つまり根っからのテロリストであれば、これはもちろんそれなりの立派なストーリーだと思う。

それは荊軻の話と似ている。荊軻の話の中には 2 人もの人間が自殺してまで荊軻を信用させる。そういうことが有り得るのかというと、そこが日本人の感覚だとあり得ない話かもしれないが、中国人にとっては、自分の首を差し出してそれを持っていけと、そういうのはあまりにも政治的リアリズムで、やり過ぎるような印象を受けるが、これはこれとして有だと思う。

それを司馬遷自身はしっかり感じてそれを我々に伝えるように書いている。我々もそこに非常に感銘を受ける。それは日本人の政治観とは違うかもしれないが、それはそれとして有で、そこには深く感銘を受けるものがある。

それに対してメロスは、結局、暴君の心をたぶらかして、暴君の気持ちを変えさせるための友情劇をやるほど賢かったのだ、というような読みは、成り立つでしょうか。それは甘いというふうに感じる。暴君がそのようなセンチメンタルな感受性を持っているとはとても思わない。それに期待するような人間はもともと政治的センスがないと思う。つまり暴君も、我々が 2 人で友情劇を演じてやれば心が変わるかもしれないぜ、やってみせよう、というような、そんなセンチメンタルな劇に感涙にむせぶような暴君だろうと期待するのは、どだいおかしい。それも政治的センスがない。暴君暗殺を企てるという大それた、そのような志を持つ器ではないことを示しているだけだと思う。

次代を拓く君たちへ　―　田島正樹からのメッセージ　―

文学が教えるもの

知識が、**情報**とそれを説明する**理論**とからなるものだとすれば、そのいずれでもない「文学」から、我々はいったい何を学べるのでしょうか？　そういう疑問を持つ人も多いと思います。

情報だけでは、世界への見通しを得ることはできません。他方で、理論は情報に意味や構造を与えてくれますが、その結果、見方を固定化してしまうことがあります。そこから、思わぬ盲点が生じがち。いったん強力な説明理論が与えられると、それ以外の見方をすることが困難になるからです。

だから、ときには自分自身のとは違う見方と出会ったり、世の中の常識となっている理論や考え方を疑ってみたりすることが必要なのです。文学は、そのような見方の自由や柔軟性を習得するための練習、つまり**自由の修練**です。

このたびは、皆さんが多分教科書などで一度は読んだことのある文学作品を取り上げて、そこに、どのように「常識」とはかけ離れたものの見方が示唆されているのか、考えてみたいと思います。

2018 年 7 月 1 日制作

編集・制作　公益財団法人国際高等研究所
ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監　　修　池内　了　猪木武徳　佐伯啓思　高橋義人

ISSN 2759-0585

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）